

マルクス主義者の資本主義の批判の方法

われわれが第一章で具体的な例をあげてしめそうとつとめたように、ナロードニキ主義とマルクス主義とのあらゆる相違は、ロシア資本主義の批判の性格のうちにある。ナロードニキは、資本主義を批判するためには、搾取の存在、それと政策とのあいだの相互作用などを確認するだけで十分だと考えている。だがマルクス主義者は、これらの搾取現象を特定の生産関係の体系として、特殊な経済的社会構成体——その機能と発展との諸法則は客観的に研究されるべきである——として説明し、かつ一つにむすびつけることが必要だと考える。ナロードニキは、資本主義の批判のためには、それを自分の理想の見地から、「現代の科学と現代の道德観念」の見地から非難すれば十分だと考えている。だがマルクス主義者は、資本主義社会において形成される諸階級を、あらゆる細密さをもって追求することが必要だと考え、一定の階級の見地からする批判だけを、すなわち「個人」の道德的判断にではなく、現実に生起しつつある社会的過程の正確な定式化にもとづいている批判だけを、根拠あるものとする。

第一巻 ナロードニキ主義の経済学的内容 P478

コメント

唯物史観に基づく批判。上記要約——「マルクス主義者は、搾取現象を特定の生産関係の体系として、特殊な経済的社会構成体として説明し、資本主義社会において形成される諸階級を、あらゆる細密さをもって追求することが必要だと考え、一定の階級の見地からする批判だけを、すなわち「個人」の道德的判断にではなく、現実に生起しつつある社会的過程の正確な定式化にもとづいている批判だけを、根拠あるものとする。」